



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「足迹」の位置：秋声像の一側面
Author(s)	和田，謹吾
Citation	北海道大学人文科学論集，2， 1-16
Issue Date	1963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34272
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_PR1-16.pdf



『足迹』の位置

——秋声像の側面——

和田 謹 吾

一

徳田秋声は、昭和十五年九月、岩波文庫の『足迹』に「あとがき」をつけて、

『足迹』は明治四十三年八月『読売新聞』に掲載された、私の最初の長篇である。」

と書いている。

これは、考えて見ると奇妙な文章である。なぜなら、もしここで「私の最初の長篇」ということが「読売新聞に掲載された」という語に限定されるものとすれば、秋声には既に「読売新聞」に『足迹』よりも長い期間連載した作品「雲のゆくへ」(明治三三・八・二)や「潤落」(明治四〇・九・三)などがあるのであり、またもし「読売新聞に掲載された」という限定を受けないものとすれば、のちに示すように、それ以前に秋声の長篇は実に数多く存在するからである。だが、それにもかかわらず、この一文はやはり『足迹』の位置を正しく示している節がある。その点を明らかにすることが、明治四十年代における秋声文学の性格を捉えるのに重要な意味をもつものと考えられる。

そこで、ここでは、『足迹』の位置を見定めるために、まずその作品が出て来るまでの時期における秋声の足跡を辿って見る必要があるのだが、そのためには、その頃の秋声を知る一つの手掛かりとして、彼が自らのその時期を描いた彼の代表作の一つ「黴」(明治四四・八八「一」、『東京朝日』)がある。その「黴」のなかで、秋声は自らを顧みて次のように書いている。

「筆を執つてゐる笹村は、時々自分の前途を悲観した。M先生の没後、思ひがけなく自然に地位の押進められてゐることは、自分の才分に自信のない笹村に取つて、寧ろ不安を感じた。」(第四十章)

もちろん、ここでM先生とは尾崎紅葉が、笹村とは秋声自身が、それぞれモデルであることは周知の通りであるが、しかしこの内容も、考えて見ればまた理解し難い節を含んでいる。なぜなら、およそ作家が世に認められるのに、作品を契機としないということは考え難いからである。ところが、この時期の秋声には、たしかにこれという作品が具体的に指摘できないのである。しかもまた、右のような記述は必ずしもこの一文にとゞまらない。「黴」が出る頃の秋声に対する認識としては、このようなものがかなり一般的であつたらしいことが、次の一文によつても略々理解できるであろう。それは『秋声叢書』(明治四四・二、博文館)の序にある「作者の小伝」で、そのなかに次のような一節がある。

「……紅葉氏没するに及び、同門の諸子と共に、子も亦漸く文壇の地位を占め来るに至れり。此あひだ長篇には『少華族』、短篇には『花束』の一篇あり。」(註一)

ただこの文で前文と異なるところは、その時期の作品として特に『少華族』と『花束』とをあげていることである。では、これらの作が自然に秋声の位置を押し進めるのに役立っていたことを意味するのであろうか。

『少華族』は明治三十七年十二月から百二回にわたつて「万朝報」に連載され、三十八年九月と十一月とに上・下二巻に分けて単行出版された長篇小説である。これは当時すぐに劇化されたりして多少の評判にはなつたようであるが、しかしこの作に対する同時代評としては、

「……余りに筋を語るに急すぎる。ムダな段取りを省いて前へ前へと急ぐ風がある。……絵にすると人物ばかり

で背景がないやうなもので、読むに骨が折れる割合に興味がわかない」(註²)

というやうな具合で、さして秋声の評価を高めたとは思われない。

また『花束』とは、おそらく明治三十八年十二月に出た秋声最初の短篇集『花たば』を指すのであろうが(註³)、これも格別世評を集めたと認められる材料がない。

すると、この二作と「漸く文壇の地位を占め来」ったことは、どうも直接には結びつかないことのものである。

たしかに、秋声は明治三十八年から四十年にかけて、数多くの単行小説書を出している。試みに「著者別書目集覧」(川島五三郎・八木福次郎共著)によつて見ると、この三年間に出版された秋声の著書は二十四点、二十七冊に及んでいる(註⁴)。だが、それらのなかには当時格別話題にされたやうな作品はまず見当たらないのである。

秋声が明治二十年代以来の長い模索を経て文壇に迎えられるやうになつたのは、作品としては明治四十年代に入つてからのことのものである。『秋声叢書』の「作者の小伝」では、前引の文章に続いて、

「されど子が特徴の最も發揮さるるに至りしは、最近自然派小説勃興の後にあり。『秋声集』、『出産』等皆な其後の作にかゝる。」

と書いている。これが、当時からこんにちにに通ずる秋声文学の見方であろう。にもかかわらず、一方には既にそれ以前から「自然に」作家的位置を高めて来たという認識がある。しかもそれは決して『秋声集』や『出産』の時期で終つてはいないという点に注意しなければなるまい。『秋声集』は明治四十一年九月、『出産』は明治四十二年四月に出版された短篇集であるが、その後の時期、すなわち明治四十三年一月、「中央公論」の「己酉文壇概観」でも、滝田樗陰が次のやうに書いている。

「徳田秋声氏は昨年にあつて何等の目覚しき働きをせない。然しせないのが当然である。氏の特徴は何等目覚しき事をせずして、ジリジリとエラクなつて行く処にあるからである。『日向ぼっこ』でも『四十女』でも『母』でも

『指環』でも『死後』でも『リボン』でも、氏の在来の作風と変つた所は目立たない。然しどれでもみなよき作品には相違ない。極言すれば、氏の芸術は今日に於て行くべき処に行き著いたやうの観はある。一転せざれば恐らくは読者に厭かるゝであらう。然し厭かれるといふ事と腕が鈍つたといふ事とは別問題である。氏は決して腕の鈍る人ではない。」

この云い方も、実は以上に挙げた一連のもの云いと同型なのである。ここで前と事情の異なる点は、例としてあげられている作品が主として明治四十二年の「中央公論」に載せられたものである点(註5)と、この時既に秋声には『秋声集』が出ており、また「新世帯」(明治四十二)が出ていた点とである。だからこの場合は、一方ではこの二著が出たことによつて秋声が認められるようになったという事実があるとともに、一方では依然としてそれらの仕事がこので格別「目覚しき働き」として意識されずに、ただ何となく文壇的位置が高まつたという当時の認識もあつたということになる。この矛盾を考えて見なければならぬのである。

二

そこで考えられることは、やはり『秋声集』や『出産』や「新世帯」などの性格であらう。『秋声集』は、明治三十九年十月の「老音楽家」以来の短篇十七篇を収め、『出産』は主として『秋声集』以後の短篇十三篇を収めたもので、ともに短篇集である。だから所収の各々の作品は、それぞれに発表されたときには格別の注目をひかず、短篇集となつた時に「集」として注目されたということなので、そのうちの一作を以て秋声を代表させるだけの力にはなり得ていなかった。また「新世帯」は短篇ではないが、やはり平凡な市井の新世帯を坦々と描いたもので、格別の話題を提供するようなものでもなかった。島崎藤村には「破戒」という作があり、田山花袋には「蒲団」という作品がある。それらが、一作で略々彼等の位置を決定的にしたことは当時の批評を見れば明らかである。そういう点で、「新世帯」

や『秋声集』をも含めて、明治四十一年、二年までの秋声には決定的な代表作がなかったということは否めないようである。そしてまた、そういう意味では、四十三年に入って「足跡」（新聞連載中はこの字で、単行本にした時に「足跡」となった）という作品が出て、こんにちではこの作品が秋声の長篇として傑作と認められる最初のものとなっている。冒頭に引用した秋声の回想に「私の最初の長篇」とあったのは、おそらくそのようなこんにち的な立場における回想なのである。そこで、ここにんちでは、明治四十三年まで来て秋声の位置は決定的になったように考えられ勝ちだが、しかし実はこの「足跡」として新聞連載中はあまり注目をひかなかったようである。注目をひかなかったばかりではない。この作品は当時としてはもつと不遇だったのではないかと考えられる節が多い。

「足跡」は明治四十三年七月三十日から、読売新聞の第一面に、挿画なしの小説として連載され始めているのだが、同年十一月十八日、八十六回で完結するまでの間に、飛び飛びに休載が目立ち、合計二十六日分抜けている。その理由については、わたくしが直接徳田一穂氏から聞いた話によると、秋声が、「足跡」という作は大変書きにくかったと洩らしていたことがあるということであり、岩波文庫版の「あとがき」でも、当時の苦吟の情況を思いおこして「題材が題材なので、相当書き辛かったものと思われる」と自ら書いてもいるところから、そういう事情もあるいは影響しているかも知れない。題材が、秋声夫人の、秋声と結婚する以前の半生を扱ったもので、秋声としては知らない時期の知らない世界のことであるから、作者として素材の把握や表現が困難であったことは十分に考えられる。「徹」のなかの随所に、お銀（即ち秋声夫人）の前歴を探り知ろうとする笹村（即ち秋声）の眼があるのを読みとることができる。そういう長い探索と、心象を結ぶことの困難さとを乗りこえることにおいて、「足跡」ははじめて描き得たものであろう。そこには、ある意味で、花袋が『田舎教師』を書く時に苦しんだのと同じような困難がひそんでいたであろう。花袋が『田舎教師』に実現した平面描写の手法をこの『足跡』に発見して共感推賞した一つの理由はおそらくその辺にあると考えられる。

しかし、そういう理由が一方では考えられるにもかかわらず、やはり「足跡」は新聞連載中決して優遇されていたとは思われない節がある。たとえば、一つには、まだ連載を始めて三十回にもならない八月二十九日に、読売新聞は早くも「足跡」完結後の連載作として「小説酒客列伝 幸田露伴」の予告を出しているという点がある。これは、やつと三分の一ほどしか書き進んでいなかった秋声としては、決して愉快な処置ではなかったであろう。次に、十月十日、第六十一回までは第一面に載っていたこの「足跡」は、翌十一日、第六十二回からは普通号で第五面の、文芸の頁に移されているという点がある。これは、十月十三日が読売新聞の第一万二千号記念に当るため、その特集企画などによって増頁もあり、紙面が動いている事情もあるが、一万二千号当日も「足跡」は休載になっており、これらのことは、少なくとも「足跡」が編集上重視されてはいなかったことを証することにはなるう。おそらくは作の評判も香しかなかったのに合わせて、次号予告や紙面移動など、所遇が悪くなっているのではないかと考えられる節がある。断続的な休載も、そういう面からの社の都合で休載になったこともないとは云えないように思われる。そして、十月二十八日になると、露伴の作を「愈々十一月上旬より掲載」と予告し、以後十一月九日までに三度にわたって「新小説掲載予告、目下掲載せる小説『足跡』は旬日を出でずして大団円を告げ……」という社告をしている。秋声は実に最初の「次作予告」が出て以来八十二日にしてやっと八十六回の筆を擱いたのである。後年、秋声は自ら「こんな読者受のしさうもない小説が、新聞に連載されてゐたことを考へると、新聞の経営にも今より遙かに余裕があつた」のだと回想している（「あとがき足跡」）が、この一篇にそそいだ秋声の努力と忍耐とは、それが書きにくかつたことにあるにせよ、紙上で冷遇されたことにあるにせよ、なみなみならぬものがあつたことが想像される。「足跡」が終了した日の読売新聞第五面「楽屋落」欄は、「黒ン坊」の署名で「徳田秋声氏の『足跡』は大好評の裡に八十六回を以て本日終りを告げた……」とは書いているけれども、その年の末の読売の一年の展望では、記録すべき作品として一応この作の名だけは挙げているが、内容については一言も触れないで片付けている。しかも、次作として足掛け四ヶ月も予告され続け

た露伴の「酒客列伝」は、十一月十八日「足跡」の完結後、二十二日に第一回を出したきり、以後書かれていない。その辺にも疑問が残る。少なくとも「足跡」が厚遇されたとは思えない理由の一つである。

そんなわけで、「足跡」が発表された明治四十三年当時においては、これはまだ秋声評価の材料のなかに入って来ていないと見るのが妥当のようである。そのことは、たとえば明治四十四年五月の「文章世界」が募集した「文界十傑投票」がその事実を側面から証明するであろう。その投票は、十位までの結果を翌六月号に発表しているが、「足跡」のあと「徴」の前という時点で、秋声は、一位藤村の一五七、二位花袋の一四一、三位白鳥の九三という得票状況のなかで、辛うじて二票を得て最末尾に名をとどめているに過ぎないという状態なのである。もちろんこの種の得票数には全幅の信頼は置けないかも知れない。しかし、それにしても秋声の二票というのは、花袋編集の「文章世界」として数字上の操作があるとすれば、むしろ何とか第十位に名をつらねるために数を加えてこそあれ、減らした数とは考えられない。いずれにせよ、「文章世界」周辺の文学青年層における秋声の人氣を探る一助にはなる資料であろう。

島崎藤村が「徴」を評した時(註6)、「お銀に関する部分だけを残して他はすべて打碎いてしまひ、そして、この女の一生を書いて見たらどんなものだらうかと思ふ。」と云ったことは、それがたとえ「徴」の構成に対する不満であったにせよ、明らかに「足跡」に対する注意を怠っていたことを物語るものであり、花袋が「足跡」に「平面描写」の極致を見てはめたのも『足跡』単行出版の明治四十五年四月以降のことである(註7)。そしてその『足跡』の出版のされ方は、当時の広告を見ると「徴」の姉妹篇ということがキャッチ・フレーズだった(註8)ので、『足跡』の評価は、種々の点から見て、どうしても「徴」の好評に乗って、その後で単行されたあとの問題になるのである。辛うじて、徳田秋江が明治四十三年の文壇を回顧総評した文章(註9)で、漱石の「門」、藤村の「家」、花袋の「縁」、小剣の「木像」、泡鳴の「放浪」、芦花の「寄生木」、三重吉の「小鳥の巢」、節の「土」とあげたなかで、特に秋声の「足跡」を論じて次のように云っているのが注目される。

「自分は徳田秋声氏の『足跡』がよかつたやうに思ふ。之れは分けても、本になつてから通読して見たいと思つてゐる。相変らずの秋声氏の作で、新味がないと言へばいふやうなものゝ、平凡人の胸の思ひや、その生活の態度などが、よく表はれてゐて、簡単な必要な特色的な部分だけを選んで描いて、人物や其の情懷を浮き上らして見せる技巧は、同氏としても大変な進歩だと思つて敬服して見てゐた。枯た鏽のある筆だ。あれで題材が華なものか、強烈なものかであつたならば、素晴いものだが、さうでないのが秋声氏だ。」

しかし、これとても「本になつてから」ということなので、「足跡」に対する本格的な批評ではなかつたし、そのようなものはやはり「鑑」以後の単行本出版後においてしか出なかつたのである。「足跡」でさえ、明治四十三年当時においては、秋声の位置を決定する代表作とはなり得ていなかった。

三

このような状況は一体なにを物語るであろうか。まず一つには、秋声の長篇小説が、既に何十冊となく単行出版されていたにもかかわらず、文壇に彼の声価を定めた長篇小説はやはり「鑑」以後であるということが明らかにさう。そして、また、それにもかかわらず、秋声が文壇にいつの間にか地位を得ていたという認識が一方に成立していたとすれば、それは短篇においてでなければならぬ。実は秋声は短篇集『花たば』の序文で、

「短篇の価値豈に容易に大篇の下に置くべけんや。否、予は短篇に於て、多くの場合、反つて価値ある芸術品を得べきを信ずるなり。そは適切なる自然其物を捉ふるには、長篇よりも、短篇小説の方反つて多くの便利を有するを感じればなり。」

と云つていて、自ら短篇を得意とする旨を述べていたのであつた。

だからここで、さきにあげた滝田樗陰の「何等目覚しき働きをせ」ずに、という言葉は、傑出した長篇を書かない

という意味に理解されなければならないことになる。樗陰が秋声を認めるとき、いくつかの短篇を列挙していたこともここで納得出来るわけである。そしてそう理解すれば、秋声評価上の一つの疑問点は理解が出来るので、前期は短篇において認められ、明治末年以後はそれに長篇の評価をも加えて、彼の声価が決定的になったということになる。

だが、そうとすれば、短篇・長篇を統一する秋声文学の、評価の基準はどこにあったのか。何をもって文壇は秋声の短篇をまず認め、そしてまた長篇を認めるようになったのであろうか。ここでその疑問を明らかにするものは、秋声がまず注目され始めた明治四十年代初頭の彼の作品であり、そしてそれに対する評価の仕方である。そういう意味で注目されるものは、その時期、すなわち明治四十年九月三十日から翌四十一年四月六日にわたって読売新聞に連載された「涸落」という長篇小説である。この作の出始めの時期はちょうど花袋の「蒲団」が発表されて凡そ一カ月あと、藤村が「春」の最終稿に着手したと考えられる時期に略々重なり、その完結の時期は花袋の「生」、藤村の「春」発表の直前に当たっていて、そういう時期における読売新聞での秋声の長篇という点が特に注目に価するのである。

その「涸落」において、秋声はかなり自己自身の性情を色濃く投影した木暮良介という人物を主人公にしている。ある意味で、良介は「徹」の笹村の先行人物として認めることが出来る。林や相良という登場人物にも、秋声周辺の実在人物がなにかしきモデルに使われているようにも考えられる。

もちろん秋声は、この作をなす直前の明治四十年九月に「画のモデルと小説のモデル」という一文を「文章世界」に寄せて「事実を取つて書くといふ事は、何となく気がさして従来は私は余りやらなかつた。」と云い、「実際モデルがあるとしても、これを筆にする場合には多少違つてくると思ふ。」と書いていて、そのモデルの描き方が秋声の場合には事実そのままではないことは明らかである。にもかかわらず秋声がこの作の直前にモデルとか事実とかいう問題を右のような形で意識していて、そしてさきに指摘しようなこの時期にこのような長篇を書いているということが注目されるのであつて、それ以前には、短篇にはまま秋声的な性格を反映した人物が登場しているものはあつても、長篇

にはこのような形で秋声自身を感じさせる作品はわたくしの読み得た範囲ではなかったように思われる。つまり、これまで長篇が、たとえば前引の「少華族」の評に見られたような「読むに骨が折れる」ような、筋立ての趣向ばかり複雑なものであったのに対して、これは秋声その人を感じさせるものが出て来ているのである。「凋落」はそういう点において、さらには構成の上においても、「蒲団」の影響があることを明らかに感じさせるものがある。そういう形で秋声の長篇小説はこれまでにない新しい形を生み出していたのである。

だがこの作は、単行本にまとめられたのが明治四十一年七月(博文館刊)であつたために、これに対する批評はそのあとの、四十一年九月号の雑誌に出て来ることになる。その時期は、ちょうど『秋声集』刊行の月に当る。そういう時点で、「早稲田文学」の「新書雜感」欄は、「SG生」の署名(註10)で次のような批評を掲げている。

「○由来秋声氏は人としては深く而も真実に人生の物憂い重苦しい頼りない味を感じすべき性情の人である。又たしかにさう云ふ心的生活を送つて居た人である。併し氏は作者としては甚だアートの融通が利かない人であつた。そのために氏はこれまで煩はされて居た。氏が以前に用ひて居たアートは、多くは世間並の小説の型であつた。個性のない特長のない型でもつて小説を書いて居た。氏はその型のために矢張り型のやうな人生、型のやうな自然を綴り合はせて小説を作つて居た。つまり型のために知らず識らず自己を殺して居たのである。」

○所が此二三年わが小説界に起り来つた革新の叫びは、又わが秋声氏をも自覚せしめた。自覚したる氏は今迄知らず識らず圧迫されて居た型と云ふものを脱した。氏の短篇が近來に至つて突如として傑出するに至つた由来は確かにこゝにあると思ふ。」

右のように論じた後、「凋落」のなかにはまだ型にはまつたところが残つてゐることを指摘した上で、

「吾人はかう云ふ見地から、『徳田秋声氏の近き将来』と云ふ言葉に深い興味を覚える。」

と結んでいる。

ここで評者が云おうとしていることは、「涸落」のなかに、従来の秋声の小説すなわち「世間並の小説の型」を脱するなにかを感じていることであり、そのなにかは秋声自身の送つて来た「心的生活」であることを見ようとしている点である。つまり、従来の秋声の長篇にはそういうものが感じられず、そういうものはいち早く短篇に見られたというのである。ところが、「涸落」に至つて長篇ものにもそれが感じられるようになったというのである。こういう状況のなかで、機を逸せずに、秋声の長所と見られた短篇の集まりである『秋声集』が出たということが、秋声文学の評価を定める上で第一段階を画する重要な役割を果していたわけである。明治四十一年十一月の「早稲田文学」新書紹介で、相馬御風は続いてさらに『秋声集』を評し、前記「涸落」の評とほとんど同じ趣旨のことをくりかえし述べたあと、

『秋声集』一卷を僕は白鳥氏の諸作と相並んで近時の文壇に最も特色的な作品として推奨しやうと思ふ。……どこと云つてストライキングな所はないが、細い冷たい糸でジリジリ縛られるやうに感ずる作が多い。一世を風靡するといふやうな作風ではないが、いつまでも／＼本来の力を失はないであらう。」

と書いた。その『秋声集』には、秋声の「心的生活」をのぞかせる作品がかなり多く含まれていたのである。

このようにして、秋声の短篇のなかに認められていた秋声的なものが、次第にその長篇のなかにも浸透し定着して行くのには、この時期からなお若干の時間を要するのであり、それまでの秋声はやはり短篇において認められていたものと考えられる。だから、「足跡」の直前、明治四十三年六月の時点においても、片上天弦は「文章世界」の小説月評で秋声を次のように評していた。それは秋声の「新居」(明治四三・六「中央公論」)「徒弟」(明治四三・五「文章世界」)を評したあとのことばであるが、

「氏の作はこの二つとも、似寄つたやうな情味のものである。氏の作には何をしても思ふやうに行かないで、クヨクヨしながらキツパリと決断してしまふことも出来ないでグズグズと冴えない気持ちで日を送るといふやうな

人物が多く出て来る。いつも同じやうだとは思ふが、氏の現はしかたがだん／＼老練になつて枯れて来るのでこの作者でなければ見られない味はひである。」

かくて、「徴」以前における秋声の評価は大体一致してその短篇のなかにある地味な作風に長所を認め、それはまた当然短篇であるがゆえに幾分かのはがゆさを含んだものであつて、決定的な評価をひき出すものにはなり得なかつたことがあきらかにならう。

四

自然主義時代における秋声の評価上の問題点は、如上の考察で略々納得の行く点が多い。しかし、それは秋声の短篇が如上のような性格をもつて来た時以後の問題であつて、その時期はやはり既にくりかえし確かめて来たように明治四十年代にかかつての頃であらう。とすると、ここで依然として残る問題はやはり冒頭に提出した疑問、すなわち紅葉の歿後思いがけなく自然に地位が押し進められていることを知つて不安を感じたという秋声の自己認識である。

紅葉の死は明治三十六年十月であつて、「徴」のなかにおける右のような記述はどうしても明治三十年代のうちのことしか考えられないからである。その時期に秋声は短篇においてもまだ格別話題になるような作品を出していなかった。にもかかわらず秋声が「自分の地位が押進められている」と感じたとすれば、それは文壇の批評外の世界における秋声評価が然らしめたものと考えなければなるまい。

そこで問題になつて来るのは、上述の考察のなかで実は洩れていた、おびただし数の秋声の長篇小説に対する考察である。これは既に示したように、明治三十八年から四十年にかけて飛躍的にその数を増している。いまそれを「著者別書目集覧」によつて年次別に示して見れば、明治三十四年二冊、三十五年五冊、三十六年一冊、三十七年三冊、三十八年十冊、三十九年四冊、四十年十二冊、四十一年六冊、四十二年五冊、四十三年なし、四十四年四冊、四

十五年三冊という具合で、紅葉の死の明治三十六年あたりを境に四十年頃まで、急速にその数が増しているのが明らかであろう(註11)。このことと、秋声の地位が押し進められたという自覚とは、おそらく無縁ではあるまい。

これらの作品群は、ほとんどがいわば通俗小説とも呼ばれるべき性質のものである。しかし、その種のもので、とにかくこれだけの単行本が出たということは、多くのものがまず新聞に連載されてから単行本にまとめられるという形をとったものだけに、二重の形でそれぞれに多くの秋声文学読者をもった筈なのである。そういう点で、紅葉の没後、量的に秋声ほどの仕事をした作家はおそらく硯友社内にはいないのではないかと思われる。そしてそのことは、それが広い読者層をもったということを考え合わせれば、秋声の声価を広く浸透せしめる役割だけは十分に果していた筈である。そういう意味で、これらの長篇小説群は、質的にはともかくとしても、一応広い読者層のなかに秋声像を形成する上での問題として、あるいはまたそれによって生ずる秋声自身の自己認識のあり方を形成していく上での問題として、改めて注意されなければならないのであるまいか。

しかも、そういう種類の秋声作品を享受した数と範囲とは、従来知られていたよりも遙かに広範囲にわたるであろうことが、今回のわたしたちの調査によって明らかになって来た。ここにわれわれの調査とは、日本近代文学会北海道支部に属する北大近代文学研究グループの北海道内発行新聞文芸記事調査、および釧路市立図書館司書島居省三氏の調査を指すのであるが、その作業はまだ完了していないにもかかわらず、現在までのところまだ知られていなかった秋声の作品を次のように発見することが出来た(註12)。

- 1 「羊飼ふ家」 明治四〇・一・一(1回) 釧路新聞
- 2 「浮浪児」 明治四二・五・二三—七・二六(64回) 北海タイムス
- 3 「尻尾」 明治四三・一・九—一・二三(4回) 北海タイムス
- 4 「妾腹」 明治四三・三・一六—六・二二(91回) 北海タイムス

- 5 「妻の心」 明治四三・四・一四―六・八(50回)(三島霜川合作) 函館日々新聞
- 6 「夕暮」 明治四四・一・一(1回) 北海タイムス
- 7 「恋と縁」 明治四四・四・二二―八・一七(115回) 北海タイムス
- 8 「妻の心」 明治四四・五・一四―七・二二(50回)(三島霜川合作) 札幌毎日新聞
- 9 「妻の心」 明治四五・四・一八―六・二二(48回)(三島霜川合作) 樺太日日新聞
- 10 「春満々」 大正二・一・一(1回) 小樽新聞
- 11 「中年増」 大正二・三・三〇―七月以降欠号のため完結日未詳 釧路新聞
- 12 「恋室」 〔前後欠号のため未詳なるも大正二・六・一(第55回)―六・三〇(第83回)まで確認〕 小樽新聞
- 13 「妖魔」 大正四・四・二一―八・一〇(100回) 小樽新聞

右のものには、回数によってもわかるように、なかには新年特集の掌篇ものもいくつかある。しかし、百回前後まではそれを越える長篇連載ものも数篇ある。これらの作品は、それだけ多くの読者を地方にもつていたわけである。そしてこれらの原稿は、たとえば「妻の心」が「函館日日」「札幌毎日」「樺太日日」に同じものが掲載されていることでもわかるように、当然ながら、おそらくは通信社を経由したものであり、したがってそれは一紙に掲載されるだけではなく、むしろ重複して各地方紙に載せることの方が普通である。現に「妻の心」については、既に明治四十四年九月十六日から十一月七日までやはり五十回にわたって「北国新聞」(沢金)に掲載されていることが報告されている。

(但しこの場合には合作者としての三島霜川の名は並記されていない由である。)

したがって、全国の地方紙などを総合して見れば、中央文壇の話題にはならなくても、徳田秋声の文名は全国的にかなり広く、数多く、行き渡っていたに違いないのである。

もちろんこのようなおびただしい数の作品のなかには、既に多くの人々によつて指摘されて来たように、秋声自身の作ではなく、代作ものもあるであろうことは十分に考えられる。しかし、たとえばそれが代作ものであったにせよ、

それは一般読者の関知するところではない。秋声の文名を高からしめたことに変わりはないのである。初期の秋声の長篇小説は、おそらくそういう役割を果していたのである。その量的な秋声の文名を支えた長篇小説という形式と、質的に秋声の文名を高めつつあった彼の短篇小説の内容的な要素とが、初めて合体統一されたのが「足跡」という作品になるのである。後年秋声が云った「私の最初の長篇」という言葉は、おそらくそういうことを意味しているであろう。そしてそこに、秋声の位置は名実ともに備わったと見てよいであろう。だから、「足跡」がたとえ「黴」のあとになって文壇的に認められたとしても、あるいはまた「黴」の好評に便乗して売り込まれたとしても、そのことは『足跡』という作品自体には何の關係もないのである。明治四十年代の秋声の文学を確立する上で、「足跡」は彼の文学を統一する上に重要な役割を果していた。「足跡」はそこに意味を見出さるべき性質のものである。

註

1 この「作者の小伝」は、全体の記述内容から考えて見ると、ことによると秋声自身の筆になるものであるかも知れない。

2 「新潮」明治三八・一〇。吉田精一氏「自然主義の研究」上巻四四七頁所引による。

3 「花たば」所収の作品は次の十四篇である。

「ひとり棲」明36・2、「暗涙」明38・7、「お静」明34・9、「小革命」(未詳)、「おぼろ月」明38・4、「コサックの少女」(未詳)、「撫子の色」明36・7、「ロシア人」(未詳)、「すきぶすき」明36・1?、「一粒種」明37・1、「村の平和」(未詳)、「せがれ」明38・8、「召集令」明37・10、「明朝の望」(未詳)。

4 参考のために「著者別書目集覧」に掲げられた明治三八〜四

〇年の秋声の著書を示すと、次のようなものである。

「楓の下蔭」(合集)明38・1、「かこひもの」明38・4、「病窓愛」明38・6、「新婚旅行」明38・8(後版)、「結婚難」明38・9、「少華族」(二冊)明38・9、「女教師」明38・10、「目なし児」明38・12、「花たば」明38・12、「血薔薇」明39・1、「落し胤」(母の記念)(二冊)明39・4、「わたり鳥」明40・1、「女心」明40・4、「おのが縛」明40・4、「黄金窟」明40・5、「島の秘密」(奈落)明40・6、「熱狂」明40・9、「わかき人」明40・11、「女の秘密」明40・11、「美人のあたひ」(合著)明40・12、「焰」(二冊)明40・41、「母の血」明40・12。

5 「日向ぼっこ」は明42・1「早稲田文学」、「四十女」は明42・1

1「中央公論」、「母」は明42・4「中央公論」、「指輪」は明42・11「中央公論」、「死後」は明42・9「早稲田文学」、「リボン」は

明42 2 「中央公論」にそれぞれ発表されたものである。

6 『徴』の批評「明治四五・二」。

7 明治四十五年五月「文章世界」。

8 たとえば、明治四十五年一月二十三日発行の「徴」再版本奥付裏の「近刊広告」を見ると、次のようにある。

『足迹』は『徴』の姉妹篇である。『徴』を読んだ人は、更に『足迹』に就いて『徴』の女主人公お銀の前半生を尋ねなければならぬ。」とある。

9 明治四十三年十二月二十八日「国民新聞」所載「四十三年小説界概観(一)」。

10 この「SG生」とは、この文の内容が、明治四十一年十一月号に載せられた相馬御風の「秋声集」評と略々論旨を一にしているところからも、SGが相馬御風の略号であろうことは略々明らかである。

11 この数は、他の作家との共著のものも一冊と数え、一作品が二巻に分けて出版されたものは二冊として数えた。これはもちろん単行本になった作品の数を示すだけのものであるから、単行されないままに埋もれてしまった作品群を考慮に入れば、実際に新聞その他で発表された秋声の長篇小説はこれよりかなり上廻る数になるであろう。

12 ここに掲げる作品についての具体的な内容紹介は本稿の目的ではないので、それについては北大国文学会編集「国語国文研究」第二十八号において詳細に報告することにする。

本稿は、昭和三十八年度文部省科学研究費による研究の一部である。